2018 年アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

鯵坂誠之*1，東田卓**2，辻元英孝**2，室谷文祥***3，
栗田佳代子****4，加藤由香里*****5

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2018

Shigeyuki AJISAKA*1, Suguru HIGASHIDA**2, Hidetaka TSUJIMOTO**2,
Hisayoshi MUROYA***3, Kayoko KURITA****4, Yukari KATO*****5

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校では，教育改善の一環として 2009 年よりティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催している．さらに，2012 年からはティーチング・ポートフォリオ作成者を対象として，アカデミック･ポートフォリオ作成ワークショップを同時に開催している．本稿では，2018 年度のアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要を説明した後，ワークショップ参加者の感想を報告する．

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ，教育改善，統合

1．はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下，本校と略す）は教育改善の一環として 2009 年よりティーチング・ポートフォリオ（以下, TP と略す）の作成に取り組んでいる[1]. これに対してアカデミック・ポートフォリオ（以下，AP と略す）とは，「教育，研究，サービス活動（社会貢献・管理運営等）の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり，教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[2].

2012 年 1 月 4～6 日に大学評価・学位授与機構小平本部で AP 作成ワークショップ（以下，WS と略す）が開催された．このときの手法を踏襲して，AP 作成 WS を開催した．それ以降 AP 作成 WS は毎年開催され，2018 年に本校で第 14 回及び第 15 回の AP 作成 WS を開催した.

本稿では，その WS の実践並びに考察を報告する[3].

2019 年 8 月 19 日 受理

*1 総合工学システム学科　都市環境コース (Dept. of Technological Systems: Civil Engineering and Environment Course)

**2 環境物質化学コース（Environmental and Materials Chemistry Course）

***3　一般科目 (General Education)

****4　東京大学 (Tokyo University)

*****5　首都大学東京 (Tokyo Metropolitan University)

2．アカデミック・ポートフォリオについて

本校の AP 作成 WS は事前に TP を書いた人を対象に 3 日間で AP を完成させるスタイルである. AP は, 教育・研究・サービスのそれぞれについてふりかえり記述するが，それだけでなく，これら三者の互いの連携・寄与について考察する「統合」の章があることが最大の特徴である．また，これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを 3 つあげて記すことも AP の大きな特徴である（これは，教育 1 つ，研究 1 つ，サービス活動 1 つと決まっているわけではなく，教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等，教員の活動スタイルにあわせることができる）．さらに，将来達成したい目標を 3 つ記す点も単純な「業績リスト」と大きく異なる点である．これらを十分に自己省察しながら記述していく[2]．

3．作成ワークショップ

2018 年度は本校では 2 回の AP 作成 WS を行った．AP 作成 WS の概要を表 1 に，WS における 3 日間の主なスケジュールを表 2 に示した.

表 1　2018 年度に開催した AP 作成 WS の概要

回	日程	メンティー	メンター	スーパーバイザー
14	9 月 5 日～7 日	学内 2 名 学外 1 名	学内 1 名 学外 2 名	加藤由香里
15	12 月 25 日～27 日	学外 4 名	学内 3 名 学外 1 名	栗田佳代子 東田卓

表 2　AP 作成 WS のおもなスケジュール

	1 日目	2 日目	3 日目
午前		個人ミーティング(2) AP 作成作業	個人ミーティング(4) AP 作成作業
午後	オリエンテーション AP チャート作成 個人ミーティング(1) AP 作成作業	個人ミーティング(3) AP 作成作業	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼン テーション 修了式
夜間	夕食会:意見交換会 AP 作成作業	AP 作成作業	修了を祝う会

4．AP 作成の実際

4.1　メンティーとして

岡田高嘉　2018 年 8 月，私は県立広島大学で開催された TP 作成 WS に参加した．それまでは自分の教育理念というものを真剣に突きつめて考える機会はなかった．しかし，WS に参加して，自分のこれまでの教育実践を真摯に振り返り，自分の教育理念を明確化することができた．これは私にとって非常に有意義な体験であった．このため，私は間をおかず，AP も作成したいと考えた．「教育」だけでなく，「研究」と「サービス活動」についても，自分のこれまでの実践を振り返り，それぞれの目的を明確化した上で，相互の関連性を自覚し，有機的に結びつけて，統合的な理念を描き出したいと思い，2018 年 12 月の AP 作成 WS に参加することとした．

「教育」「研究」「サービス」の諸活動は，別個独立したものであり，相互の関連性は希薄であると思われがちである．とりわけ，「サービス」と「教育」又は「研究」の関連性は，ほとんど意識すらされない．AP 作成の眼目は，3 つの諸活動の結節点又は交差点を探り出し，自分自身の統合的な理念を描き出すことである．

AP 作成 WS に参加して，メンター（古田和久先生）とスーパーバイザー（東田卓先生）の支援を受け，自分の統合的理念を一応描き出せたことは，非常に意義深かったと考える．統合的な理念は，大学教員としての私の羅針盤として機能する．それは私が進むべき道を指し示すものである．

短期集中的に，いわば合宿形式で，自分自身の教育又は業務全般を省察する経験は，このような機会でない限り，他ではなかなかできないと考える．大部屋（会議室）で作業に没頭する中，時折，他の参加者とコミュニケーションをとれる機会にも恵まれた．同じ目的に向かって頑張っている同志ということで，親近感がわき，仲間意識が芽生えた．

メンターは，私のまとまりのない雑多な話に熱心に耳を傾けて，建設的かつ示唆に富む提案をいくつも提示して下さり，未熟な私を始終辛抱強く支えて下さった．試行錯誤の末，統合的理念を何とか明確化することができたのは，メンターとスーパーバイザーのお陰である．

河内山晶子　本研修に参加させていただくご縁をくださったのは栗田先生である．東大シンポジウムで吉田先生のプレゼンの見事さに驚嘆し，講演後，「どうしてこんなにも聴衆を惹きつけるプレゼンができるのですか？」と尋ねたところ，吉田先生が東大 FFP のことを教えてくださり，すぐに栗田先生に会わせてくださった．栗田先生の采配で，私は OG として FFP に参加させていただく幸運を得た．その授業の中で紹介されたのが TP/AP だった．興味を持った私に北野先生をご紹介くださり，2017 年 12 月の初参加を可能にしてくださった．

TP という初めて触れる世界の入口で出会ったのが，メンターの鯵坂先生（スーパーバイザー栗田先生）だった．これは本当にうれしいことだった．TP の事前準備も十分でない私を放り出すことなくしっかりと支えてくださった．今でもあの時の充実感，幸福感を思い出す．自分がその時抱え込んでいた思いの全て，いわば心の叫びを，しっかりと聴いてくださった． 私の中で，こんがらがったままモヤモヤしていたものを，先生は一旦引き出して，整理させてくださったのだ．本当にありがたいひとときだった．この TP で私の心に強く刻まれたことは，「問題を顕在化させることは勇気が要るが，恐れず出し尽くせば問題は解決へと歩み出す」ということだ．この挑戦は精神的にも負荷がかかりすぎて，とても一人ではできるものではない．しかし信頼する人と一緒なら向き合うこともできた．改めて，「聞いてくれる存在が居る」ということの大きさを痛感した．

半年後の 2018 年 9 月の AP でもその感を一層強くした．メンターは東田先生（スーパーバイザーは栗田先生）で，特に最初のセッションでは，私が連発する様々な問いに驚くほどの柔軟さでご対応くださり，世界が大きく広がっていっているという充実感に私は目を輝かせた．そんな中，一時が万事そのようにどんどん拡張していく傾向のある私の思考回路を，「この AP においてなんとか形にしなければ」と，収束の方向に向か

わせようとして, 先生が一生懸命になってくださった. 私自身もそれを痛感しつつも，なかなか自分自身に実態が伴わなかったというなんとももどかしい思いをした．すべて私の至らなさからであるが，これもある意味貴重な経験だったと感じている．先生のあの時の一生懸命さは，今も有り難く私の心に残っている．

AP の醍醐味は，メンターとメンティーの出会いの化学反応の中で生まれる，信じられないほどに素敵な生成物を体感することであると思う．それは天のギフトのようにさえ感じる．これからもこのような出会いを期してこの研修を大切にしていきたい．多分ずっと先には「自分自身の中で」メンターとメンティーの対話ができてしまうような域に達するのかもしれない．そしてそれこそが,「自立した」瞬間と言えるのかもしれない．しかしながら，自立や自律を生涯の研究テーマにしているはずの私が「そうなってしまいたくない．いつまでも誰かと一緒にやりたい.」とさえ思ってしまうほどに, この研修は「人と人との出会いによる奇蹟」が起こる研修である．これからもその奇蹟を体感していきたい．

辻元英孝　高専教員となって 1 年目に TP を作成し，およそ 10 年が経過した．そこで今回，2 つの目的を持って自身の高専教育を振り返るために AP を作成した．1 つ目は，准教授への昇任審査のためのポートフォリオの更新である．2 つ目はこれまでの高専での活動を振り返り，高専で取り組んできた内容を客観的にまとめ，それをもとに高専における自身の目標を再設定することである．

私は着任 1 年目に先輩教員より，授業準備に追われるだけで過ごすのはもったいなく，若手教員だからこそ不安に思う点を教育目標として文章化してはどうかと勧められ，TP を作成した．そして翌年以降も個人的に教育方法を検討し，授業方法などを改善してきた．また研究では，ポートフォリオを作成することはなかったが，大学や企業との共同研究を実施し，共同研究を学生の研究テーマとすることで学生教育に反映してきた．そして地域貢献では，高専の化学系教員が一丸となって実施している「子と親の楽しいかがく教室」や個人として実施している出前授業などで小中学生の理科教育に貢献してきた. 最後に校務分掌では, 担任, 学生副主事，学生指導委員や広報室など多様な役職を担当してきた．しかし，これまでに高専教員として取り組んできたすべての仕事について客観的に評価してこなかった．

そこで今回 AP を作成し，自身の高専での活動を客観視し，これまでに意図してこなかった部分を明確化し，より学生教育に活かしていきたいと考えた．

作成が始まった AP では，新たに研究と地域貢献と校務分掌の関わりをまとめようとメンターの方と話をしたが，中々関係性を見出すことが出来ず焦るばかりであった．そして，書きだしたものに対して，このまとめ方で良いのかという考えが起こり，まとめるための明確な線引きができなかった．しかしメンターの方よりまとめ方は書き手の自由であり，自身が納得できる観点がしっかりとしていれば，何物にも縛られず，自由な発想が許されていると聞き，自分なりにまとめることができた．自身の高専教育の取り組みをまとめてみると，自身が思っていた以上に学生指導（学生が学ぶための環境整備）に多くの割合が割かれていることが明らかとなった．そのため今後は，少し研究における割合を大きくすることで，学生が学んだ内容を自由な発想で研究に取り組める環境を整備しようと考えるようになった．

この AP の作成を通じて，メンター，メンティーやスーパーバイザーなどいろいろな方の話を聞き，自身を見つめなおすことができ，新たな目標の設定をできたので，今後に活かしていきたいと思う．

戸田博之　2017 年 12 月の TP 作成 WS に続いてちょうど 1 年後には AP 作成 WS に参加した．いずれも普段はほとんど行わない「自らを振り返る」，それもメンターという他者とのコミュニケーションを通じて自分を客観的に見つめる絶好の機会であったと感じている．さらに，振返りを文字にするという作業も新鮮な体験であった．

TP を書いた 2017 年は，ほぼ 30 年間金融機関に勤務した後，独立して 6 年ほど経過した時期であった．金融関連翻訳業，あるいは英語や金融関連の企業講師業に携わりながら大学で週 1 回英語非常勤講師を務めていた．この間，東京大学大学院に社会人入学し，研究活動の匂いを嗅ぎ始めた時期でもある．

TP 作成作業は，ある意味，狭義の教育（ティーチング）に焦点を当てたものであったため，大学での英語教育を深く掘り下げるという意味では極めて有意義であった．しかし一方で，自らが社会で果たしている役割を統合し，以後の具体的進路について考える必要を当初から感じていた．したがって，TP 終了時には，まさにこのことを行うために，翌年の AP 作成 WS への参加をほぼ決心していた．

AP 作成 WS が始まってみると，教育，研究，サービスという 3 分野での自分の活動が，どんな共通理念に基き，どう統合的に行われているかという問いをすぐに突きつけられた．数次のセッションは，メンターとのディスカッションを通じて，これらをつなぐ「キーワード」を探すプロセスであった．この中で，ディスカッションの土台となる「自分の思いを口に出して他人(ひと)と分かち合う」ことの重要性を知った．多くの AP 作成 WS での成果の中で，これが最大のものであるように思える．自分の思いを統合するという活動は，自分のみで行うこともできるかもしれないが，口に出して言ったことに対するメンターの単純な感想，「戸田さんの言いたいのは，こういうことではないですか」という問いかけ，「だったら，こんなこともできるんじゃないですか」と言った激励を含んだ提案，こうしたものがいかに自分を前に動かす力になるかを実感できた．もし，このようなワークショップへの参加をためらっている人がいたら，「あまり考えずに参加してみたら．新しい自分が発見できますよ」と言ってあげたいと思う．

TP 作成 WS での和田先生，AP 作成 WS での鯵坂先生には，多くの気づきをいただき大変感謝している．特に，人の成長を助けることにおいて，じっくりメンティーの話に耳を傾けること，その人の成長を願いながら正直に自分の思いも伝えることの大切さを教えていただいたように思う．

室谷文祥　私は本校に着任した 2014 年 8 月に初めて TP を執筆した．その内容は，着任前の非常勤講師としての経験やボランティア活動，地元の祭礼における取組などを顧みて，私自身の根底にあるもの（「学生との二人三脚」と表現）を見出した集大成であった．それから 4 年が経ち，TP 作成後の自身を振り返ること，また，今後の高専教員としての指針を模索することを目的として，2018 年 9 月の AP 作成 WS に参加させていただいた．WS の期間と前日を含めた 4 日間は，私の人生の中で忘れられないものとなったので，その概要を報告する．

AP 作成 WS 申込後，しばらくは作業が捗らなかったが，事前作業の「TP の更新と凝縮」を通じて着任後の初々しい気持ちを思い返すとともに，着任後の担任や学生副主事等の校務分掌を振り返った上で，「AP スタートアップシート」を何とか完成させ，あとは WS を迎えるのみとなった．しかしながら，WS 開催前日の 2018 年 9 月 4 日に，予想外の事態が起こった．台風 21 号の上陸である．その日は，大雨による浸水被害を避けるため，泉佐野市の実家に避難していたが，台風による被害は関西国際空港をはじめ，大阪府でも南部を中心に広範な範囲に及んでいた．台風通過後に外の様子を確認すると，近くにあったはずの小屋は見るも無残に倒壊しており，トタン屋根等の飛来物が道路の至るところに散乱し，電柱も折れ，歩くのも危険な状況であった．また，架線柱の倒壊や駅舎の火災による鉄道の運転見合わせの影響もあり，学校への交通手段はすべて断たれてしまっていた．停電も広範な範囲に及んでおり，前日の段階では WS への参加自体が絶望的な状況であると思われた．

翌朝も電車の運休が続いたが，駅までの道はそれほど大きな被害がなく，また，午前 11 時頃から阪和線の運行が再開され，開始時刻直前に何とか学校へ到着することができた．

このようにして，心ここにあらずの状況で WS が始まったため，当初はなかなか集中して作業に取り組むことが出来なかった．AP 作成においては，教育，研究，サービスを統合し，それらの核を見出すことが重要であるが，3 日間をかけて徐々に自分を再構築することができたのは，ひとえにメンターの加藤先生をはじめ，参加者の暖かいサポートのおかげであると考えている．

4.2　メンターとして

鯵坂誠之　今回の AP 作成 WS では，1 名のメンティーとの伴走をメンターとして真剣に行うとともに，私個人の目標としてメンターミーティングを充実させることにあった．メンターミーティングは，表 1 にある各回個人ミーティングの合間に行われているメンター同士の会議である（以下，会議と呼ぶ）．この会議は初めてメンターを行う者にとっては非常に勇気づけられる存在である．とくに自分が担当するメンティーにどのようなアドバイスをすれば良いか行き詰った時には，この会議でスーパーバイザーからアドバイスを受けることができるだけでなく，同席している他のメンターからもコメントを頂ける場合があるため，私自身，この機会に何度も助けられてきた．

このことは逆に，私のような複数回のメンター経験を有する者は，他のメンターから何かしらのコメントが期待されている立場にあると言い換えることもできる．しかしながら，私はこのような場で，適切なコメントをする自信がなかった．私はこの会議に際して毎回，メモを取りながら参加しているのだが，そのメモ

が読みにくいため（字が汚いというだけでなく，煩雑であるという意味において），メモのどこを見てコメントすれば良いのか戸惑ってしまうのである．

そこで今回から，メモを読みやすくするために「メンティーの人数分の枠組みを縦軸」に取り，「会議の回数分の枠組みを横軸（時間軸）」に取るマトリックス表を用意してみた．各欄に記述する文字が小さくなることを想定して，0.4mm のフリクションペンを用意するとともに，それを複数色準備した．これにより初回会議のメンティーへのコメント，2 回目会議，3 回目会議のそれへと時間ごとに推移していく流れが色別で可視化されたため，複数のメンティーの取り組みも瞬時に理解できるようになった．A3 用紙 1 枚としたことで，一覧性も確保されたため，メンティー相互の関係性まで読み解くことへとつながり，どの回の会議で同じような悩みが生じているのか，又はその人独自の問題点は何か，といったことをも比較的容易に読み解くことへとつながった．

今回は，思いつきで用紙を用意してしまったので，改良点は多くあると感じている．例えば，看護の世界におけるカンファレンス用の記録用紙などを参考に改良しても良いかもしれない．また，箇条書きの欄と自由記述の欄を加えることで，より迅速に記述していくことができるのではないだろうか･･･などなど．

このように考えると，次回の AP 作成 WS が待ち遠しくなってきた．ワクワクが止まらない．

東田卓　これまで AP のメンターを経験して，多くの先生方の「大学人としてのあり方」を見せていただいた．2018 年の夏で記念すべき 10 人目のメンターと巡り合うことができ，本 WS に参加できるきることを楽しみにしている．この「メンター」としてどのような力が必要かを問うため，常に「To be a good mentor」を当 WS に組み入れている．その中で，メンターに必要な能力・資質のうち，例えば準備として「メンターはメンティーの提出したスタートアップシートを良く読み，メンターのバックグラウンドなど基本情報を把握する」，知識として「メンターは AP の基本構成について理解している」，専門的な知識として「メンターはメンティーの原稿の一貫性を確認する」，タイムキーパーとして「2 泊 3 日の WS 内で AP の最終版に向けた方向性を示す」など[5]がある．

私はメンターとして WS に参加する前に常にこのチェックリストを読み返してから参加している．さて，今回のメンティーからは準備の資料提出に遅れや不足があり，メンターとしての準備に当時は大変苦労したことを覚えている．またメンティーの執筆がこれまでのメンティーに比べ思うように進まず，「タイムキーパー」としてのメンターの力量の無さを感じた．TP の成果物は本人のものであり，メンターは単なる伴走者であるから無理やり書かせるものでもないとも思っていたが，やはりメンターを引き受けた以上，完成稿まで仕上がったものを共有したいと思うものである．この場合でも一番慰めていただいたのはベテランのスーパーバイザーであった．スーパーバイザーの仕事は「酒場の女将」と表現されているが，メンタリングがうまくいかない場合，かなりの経験者であってもメンタリング方法に誤りがあったのか？執筆指針がうまく進むように持っていけなかったのか？など悩むことが多い．良きスーパーバイザーはメンターのいちばん重要なサポーターである[4]ことを痛感した．

これらの経験を元に，良きスーパーバイザーとなり，メンターにとってより頼られるスーパーバイザーになりたいと痛感した WS であった．2019 年冬の WS ではスーパーバイザーとして参加したが，メンターにとって良いメンターミーティングの主催ができたかどうかのアンケートは取っていないが，メンターミーティングでは極端に悪いメンタリング・メンターミーティングとの報告は受けていない．メンティーにとってもメンターにとっても良い WS になるよう，スーパーバイザーとして役割は重要であると感じた．

山川修　2018 年の冬に AP のメンターを務めさせていただいた．AP のメンティーの方は，すでに TP でメンタリングを経験されているので，メンターに入るときも，TP に比べると気が楽だ．さらに，この時のメンティーの方は，所属校でメンターの経験もある方なので，最初からお互いにリラックスしてお話させていただいた．そのため，もちろんお話は良く聞いたが，こちらが感じたことは，初回のメンタリングからかなり率直に伝えていった．そのせいかどうかわからないが，2 日目の朝のメンタリングまでに，かなり AP の核心の部分がお話の中で出てきて，本人も納得されていた．

2 日目のお昼に，現況をメンティーがシェアする際，核心が出ているという旨のお話をされたが，この段階では，「迷っているのが正解です」という指摘をスーパーバイザーからされ，自分がこれで良かったのかと，逆に迷われたようであった．場の雰囲気として，なかなか核心が掴めていないメンティーに対して，それでいいですよ，と伝える意図は理解できるが，人それぞ

れ進み方は違うので，その発言をしたメンティーへの配慮もあった方が良かったな，と感じた出来事であった．これは，今後自分が全体の場で発言する際，どういう点に注意を向けたら良いか，という教訓の意味であえて書き残しておく．

毎回のメンターで感じることであるが，担当させていただく先生方は，大学教員の活動を目いっぱいされていて，その取り組み方に感激し，自分も頑張らなくては，と思うコトばかりである．そういう点では，メンターをさせていただくことで，かなり元気をもらって自分の活動のエネルギー源になっているように思う．

吉田塁　私はこれまでに構造化アカデミック・ポートフォリオ（SAP: Structured Academic Portfolio）という，書き出す内容の構造が明確化された AP のメンターを担当したことはあったが，AP のメンターはこの度が初めてであった．それでも，教育，研究，サービス，統合と記述する内容は基本的に変わらないため，これまでと同様のメンタリングを心がけようと思っていた．

メンタリングに臨む際は，事前に共有してもらったスタートアップシートを読み込み，メンティーがどのようなことを考えて教育，研究，サービスをしているのかを想像しながら，メンタリングで話す内容を決めていく．対話によって，メンティーの活動の理念が明確になることを手助けできれば，メンターとしては嬉しい限りである．今回のメンティーは AP を業績評価資料として利用することを目的の 1 つとして掲げていたが，評価のために仕方なく作成するということでは全くなく，自身の振り返りの機会として活用したい，というポジティブな想いが伝わってきて，メンタリングするのが楽しみであった．

メンティーはとても朗らかな方で，メンタリングを進めていくうちに，教育，研究，サービス，どれも楽しく活動されていることが強く伝わってきた．過去のメンタリングを振り返ってみると，いずれかの活動には少し不安や不満が垣間見えることがほとんどであった中，その陰りが全く見えなかったのである．教育，研究，サービスどれも充実した活動を行っており，またそれらの活動が相互に良い影響を与えていた．ワークショップが進んでも，その楽しさや相互に意義ある形で関連しているところはブレることなく，むしろ段々と明確になってきていると感じた．そこで，私は，今の職は本当に合っているんですね，というようなことをお伝えしたところ，今の職が非常に合っていて「ラッキー」と仰っていたことが今でも記憶に残っている．

メンタリングの流れで，メンティーの研究室を見学させてもらう機会があった．その時，たまたま研究室にいた学生と会ったが，その学生は作りものではない本当の笑顔で私に挨拶してくれた．この研究室で充実した時間を過ごしているのが垣間見える表情で，メンティーである教員も学生も良い時間を過ごしているのだな，と強く感じた瞬間であった．

今回メンタリングさせていただいたメンティーの全てを楽しむ姿勢に触れて，私も全ての活動を楽しく実行していきたいと，ワークショップ当時に大きくやる気をいただいたし，この原稿を書いている今もメンタリングや AP を思い出すことでやる気をいただいている．こんなメンティーに出会えた私は「ラッキー」だと感じている．

4.3　スーパーバイザーとして

加藤由香里　大阪府立大学工業高等専門学校の AP 作成 WS では，3 日間という限られた時間内で，メンティーがそれぞれの AP を完成できるように，事前準備，個別相談，成果物（ハイライト）発表などの活動が組み込まれている．

順調に AP 執筆が進むことも多いが，他の業務の合間をぬって参加した場合は，メンティーは落ち着いて自分の教育実践活動を振り返ることが難しい場合もある．予定通りにメンタリング（個別相談）が行えない場合，また，非常にメンティーの筆が遅く，時間通りに成果物が提出されない場合は，メンターチーム全体で対応策を考えるようにしている．その時，スーパーバイザーを中心に，「メンティーが直面している問題は何か」を議論する．しかしメンター，あるいはスーパーバイザーを体験したからといっても，正確にメンティーの状況を予想できるわけではない．

実際にメンティーと対話を続けながら，教育活動を振り返り，その活動の意味を考え，どう改善していくべきかを考えていく．その中で「メンティー自身が教師として何を求めているか」を，時間を共有しながらじっくりと探していく．

担当メンターにとっても，メンティーとのメンタリングは学びの場であり，様々な可能性（対応策）を吟味し，次のメンタリングで何をすべき（何を問いかけるか）か，考えていくことになる．この経験の積み重ねが，メンターを経験する醍醐味であり，わずか 3 日間であるが，身近でメンティーの変化を見守ることができる貴重な機会でもある．

メンターを体験した後で，自分の日常に戻った時，ふと，「あのメンティーだったら，こんな時どうするだろう」と思い出すことがある．メンター体験することで，多様な教師の人生観に触れることができる．この体験が，自分の経験だけでは知りえなかった別の教師人生を教えてくれているように思う．

栗田佳代子　2018 年度は夏と冬の 2 度の WS においてスーパーバイザーを担当した．夏は，台風のためメンティーが参加表明しながらも会場に来ることができずスーパーバイザーのみ，冬は，その夏に参加できなかったメンティーを担当させていただいた．

スーパーバイザーとは，WS においてメンターチームの統括を行う役割を担う．TP/AP 作成 WS のメンターは，特別なトレーニングを受けることなく TP/AP 作成経験のみをもってメンターを務めるため，こうした方々をメンターチームという形で支える．スーパーバイザーは，自分の担当メンティーだけでなく，他のメンターが担当するメンティーのスタートアップシートや TP の草稿全てに目を通してメンターミーティングに臨み，メンターミーティングにおいてファシリテーションをしつつ助言も行う．ときに個別にメンターの対応も行う．このようにスーパーバイザーは，メンターにはない役割が課せられている．

しかし，夏に役割として「スーパーバイザーのみ」という状況を体験したことにより，スーパーバイザーは常にメンターを兼ねるべきである，と今回感じた．つまり，スーパーバイザーはその役割が大変であっても，自分の担当メンティーを持つべきであることを今回あらためて実感した．

その理由として，まず，スーパーバイザーとしての能力維持上必要であるという点が挙げられる．スーパーバイザーは，間接的にではあるが，最終的にはメンティーを支援することが第一目的となる存在である．そのメンティーを直接支えるという「現場」から離れてしまうことで，メンターに対するアドバイスが，空虚なものとなってしまったり，バイアスがかかったものになる恐れがある．メンティーの心の声を聴き，また，心の声になる，という姿勢を維持するには，常に「現役のメンター」である必要がある．

次に，スーパーバイザーの心の支えとして，メンティーが必要である，という点である．今回の「担当メンティーを持たない」夏の WS を経験して，端的にいえば，WS 中なんとなくさみしさを感じ，終了時の達成感がいつもより低かったという印象を持った．WS において，メンティーを直接的に支援するのはメンターであり，スーパーバイザーのそれはあくまでも間接的である．スーパーバイザーという役割を果たすには，メンティーの支えが逆に必要なのである．

TP/AP 作成 WS における，スーパーバイザーの資質や役割は現在それほど明確に定義されていない．しかし，WS においてメンターが安心してメンティーを支え，そのメンティーが TP や AP を作成するためには，やはりスーパーバイザーは重要な存在でもある．今回の経験，つまり「スーパーバイザーはメンターとしても現役であること」は，当たり前のようでいて重要な資質ではないだろうか．

５．おわりに

本稿では，本校で 2018 年度に開催した AP 作成 WS について報告した．今後の AP メンティー，メンター，スーパーバイザーになられる方の参考になれば幸いである．今後は，TP だけではなく AP についても本校を発祥とする教育改善のルーツになればと切に願う．

謝辞

今回は拙著に寄稿していただいた福井県立大学の山川修先生，東京大学吉田塁先生，県立広島大学の岡田高嘉先生，明星大学の河内山晶子先生，戸田博之先生に心より感謝したい．なお，本研究は JSPS 科研費 17K01001 の助成を受けたものである．

参考文献

[1] 北野ほか，日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立高専研究紀要，第 43 巻，pp.63-70(2009) .

[2] ピーター・セルディン，J.エリザベス・ミラー著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳，アカデミック・ポートフォリオ，玉川大学出版部(2009).

[3] 金田ほか，日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府大高専研究紀要，第 46 巻，pp.71-76(2012).

東田ほか，2012 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 47 巻，pp.43-48(2013).

東田ほか，2013 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 48 巻，pp.37-42(2014).

東田ほか，2014 年度アカデミック・ポートフォリオ作

成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 49 巻，pp.55-62(2015).
中谷ほか，2015 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 50 巻，pp.91-94(2016).
金田ほか，2016 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 51 巻，pp.61-64(2017).
東田ほか，2017 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告，大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要，第 52 巻，pp.69-76(2017).
[4] 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著，実践　ティーチング・ポートフォリオ　スターターブック　～実質的な教育改善活動を目指して～，NTS 出版(2011).
[5] ティーチングポートフォリオネット：メンターチェックリスト [http://www.teaching-portfolio-net.jp/m-standard/] (最終検査日：2019 年 8 月 1 日).